

銀色のシャープペンシル

教室の机も並べ終えたし、おじは後ろにたまつたがりをかたつけるだけだ。その時、ぼくは隣ぼくりや紙くすに混じって、銀色のシャープペンシルが落ちているのを見つけた。手に取つてぼくりを払つてみると、まだ新らしい、芯も何本か入っているようだ。自分のシャープをなくしたじつは、それでちよつじよじやも思つてポケットにしまつた。

一週間ほどたたいた理科の時間。今日はグループに分かれて融点の測定を行う。グループには幼なじみの健二じとのクラスになつて仲良くなつた卓也がいる。健二は調子がよくていつも腹の立つことがあるが、ぼくと同じバスケット部で、いつも冗談ばかり言つてゐるゆかになつた。その点、卓也はやさしくてぼくが困るといつも助けてくれる。対照的な一人だがなぜか気が合つて、グループを作るといつも二人がいっしょになる。

理科室に行くと、教科委員が実験器具を配つていた。ぼくは卓也が読み上げていく温度計の値を記録していく様だ。席に着くと記録用紙が配られ、ぼくは準備しようと筆入れからあの銀色のシャープペンシルを取り出した。その時だ。卓也がぼくと

「あれ、そのシャープ、ぼくのじゃ……。」

と言つた。(え? これ卓也の?) と口がひしだら、すかさず健二が

「お前、卓也のシャープとひだらのか。」

と大きな声ではやつた。ぼくは「ひだら」と言う言葉に一瞬血の気が引いていくのを感じた。

おわおわしてゐた教室が静まり返り、みんなが一斉にぼくの方を見た。ぼくはおわてて、

「何を言つてゐるんだ。これは前に自分で買つたんだぞ。健二、変なこと言つねどんな。」

と言つて、健二をだらんだ。健二はにやにやしてゐるばかりだ。卓也の方を見るといつも口調に驚いたのか下を向いて黙つてしまつた。しばらく教室全体にいやな空気が流れた。

チャイムが鳴り、先生が入つて来られ実験が始まつた。卓也は下を向いたまゝ卓也の読み上げる値を記録していく。卓也がぼくの右手に握られているシャープペンシルを見て、いつでも落ち着かない。早く授業が終わらないかと横目でちらちら時計を見た。でも、時間がぼくの周りだけわざわざくつり流れているように感じた。本当のことを話そうと思つた。でも、自分で買つたんだと言つてしまつた前、とても声には出せなかつた。

健二は相変わらずがむかげて、班の女子を笑わせている。人の氣も知らない健二にむしろ腹が立つてきた。だいたいに健二が悪いんだ。ひとたんて大きな声で言つから返せなくなつたんだ。みんなたつて人のものを勝手に使つてゐるせいで、いつもうきだけ自分は関係ないなんて顔をしてゐる。拾つただけのぼくがじつしてじろぼうのように言われなくて、ちやがらないんだ。それに、卓也も卓也だ。みんなだけのぼくがじつしてじろぼうのように言わなければ、ちやがらないんだ。それには卓也も卓也だ。みんなの前で言わなくていいんだ。大切なものならまちがへてしまつておかはらう。シャープペンシルの一本くらいでじつまぢゅりだわつて、いるなんて心が狭いんだよ。

「実験をやめて、黒板を見なさい。」

先生の声がした。右手はじんわり汗をかいていた。ぼくはシャープペンシルをポケットにかじしまつて、みんなにわかるなじもうに汗をズボンで拭つた。授業が終わるといつも一人の前を素通りして、一人で教室におひだ。だれもしゃべる気はせなかつた。

授業後、健二が部活動に行こうと誘つてきたが、ぼくは新聞委員の仕事があるからじー一人で教室に残つた。だれもいなくなつたのを確認するやうにシャープを卓也のロッカーに突つ込んだ。これでいいちゃんと返したんだから文句はないだろうと部活動へ急いだ。

夕食をするまでもなくすぐに部屋にかけ上がるつた。勉強をする気にもなれず、ベッドにあお向けになり今日のことを考えていた。

「卓也君から電話」

母が階段の下からぼくを呼んだ。じつさに卓也が文句を言つたために電話をしてきたのだといつ考えが浮かんだ。ぼくは何を聞かれてても知らないで通そうじて身構えて受話器を取つた。

「今日のことはだけど、実はシャープ、ぼくの勘違いだつたんだ。部活動の練習が終わつて教室に忘れ物を取りにむづつたら、ロッカーの木工具の下にシャープがあつて。それに、本当にこと言つて少し君のこと疑つていたんだ。ごめん」

卓也は元気のない声で謝つてゐる。ぼくの心臓はじわじわ音を立てて鳴りだした。

「う、うん。」

と言つて、ぼくはすぐに電話を切つた。まさか卓也が謝つてくるとは考えもしなかつた。自分の顔が真つ赤になつてゐるを感じた。だれにも顔を見られたくない、黙つて家を出た。

外に出るじつはつた顔に夜の冷たい空気が痛いほどだつた。ぼくは行くあてもなく歩き出した。卓也はぼくのことを感じてゐるのに、ぼくは卓也を裏切つている。のままで本当にいいのかと自分を責める気持ちが強くなりかける。するじつもう一人の自分が、卓也が勘違いだと言つてゐるんだからこのまま黙つていればいいわざやうでくる。ぼくの心は揺れ動いていた。

5

10
— 28 —

15

突然、「するいや。」といふ声が聞こえた。僕はじきはじして後ろを振り返つたがだれもいない。この言葉は前にも聞いたことがある。合唱コンクールの時のことは。ぼくはテノールのパートリーダーだったが、みんなも練習したくなさそうだったし、用事があるからと言つて早く帰つて友達と遊んでいた。テノールはあまり練習ができないままコンクールの日を迎えてしまつた。結果はやはり学年の最下位。ぼくはパートのみんながしゃかり歌つてくれなかつたからだと言ひふらした。帰り道、指揮者の章雄といつしづになつた。ぼくは章雄にも「みんながやつてくれなかつて」と言つたら、章雄は一言、

「お前、するいや。」

と言ひ残して走つていつた。

あのときは、章雄たつて聲があるからと帰つたことがあつたのに、人に文句を言つなんて自分がするいんだと腹を立てていた。今度もそうだ。自分の悪さをだなに上げ、人に文句を言つてきた。いつもそういうして自分を正当化し続けてきたんだ。自分のするをやつまかして。

どれくらい時間がたつただろう。ふじ顔を上げると、東の空にオリオン座が見えた。あの光は数百年前に星を出発し、今、地球に届いているといつ。いつまは何も感じないのに、今日はその光がまぶしいくらい輝き、何かとてつもなく大きいやのよつに思える。少しずつ目を上げていつた。頭上には満天の星が輝いていた。すべての星が自分に向かつて光を放してゐるよつに感じる。ぼくは思い切り深呼吸をした。そして、ゆっくり向きを変えるじつ卓也の家に向かつて歩き出した。

5

10
— 29 —

15